

「あまみエフエム ディ！ウェイヴ」放送原稿 10月11日（金）放送分

テーマ「奄美先人の知恵」

あまみエフエム ディ！ウェイヴをお聞きの皆様、おはようございます。鹿児島県立奄美図書館です。今週は、毎月第2週に、奄美の文化・暮らしにおける先人の工夫などを紹介する「奄美先人の知恵」の7回目です。

今回は、奄美でサトウキビの栽培を始めた「直^{すなお} 川智^{かわち}」について紹介しましょう。

直 川智は、今から 400 年程前、大和村に生まれました。慶長 10 年、1605 年の春に船で琉球に向かう途中、暴風雨にあい中国に漂着しました。漂着したところは、今の福^{ふっけんしょう} 建 省のあたりだと言われています。

九死に一生を得た川智は、農夫として働く傍ら、サトウキビに着目し、その栽培方法や製糖の方法を学びました。一方、川智の家族は、造船技術もまだ発達していなかった時代、危険が多かった船での航海に出た川智と、長い間連絡がとれなかったために、川智が遭難したものと思いこみ、その冥福を祈っていました。

一年半ほどして帰国する機会を得た川智は、荷物を入れるための竹や柳で編んだ箱の^{こうり} 行李の底を二重にして土を入れ、その中にサトウキビの苗を三本、こっそり入れて持ち帰りました。

そして、この苗を大和^{やまとはま} 浜の西^{にし} 浜原に試しに植えてみました。すると、気候風土がサトウキビの発育にとっても適していたので、翌年には百^{きん} 斤、約 60 キログラムの黒糖を製造することができました。

当時の中国での製糖法は、二つの車に圧力をかけてサトウキビを絞る^{てんし} 軋子という方法がまだ発明されていなかった時代で、サトウキビを3センチメートル位に切ってうすに入れ、それをつき^{くだ} 砕いてこし汁をとる方法が行われていて、大変な手間と時間がかかるものでした。

また、直^{すなお} 家の記録によると、中国ではサトウキビの国外への持ち出しが禁止されており、死刑に処せられるほどの重罪でした。そのために、川智は行李の底を二重にし、土を入れて持ち帰ったと記されています。このようにして密^{ひそ} かに持ち帰ったわずか三本のサトウキビの苗が、奄美の歴史や日本の歴史にこれほどまでの影響を与えとは、誰も予想もしなかったことでしょう。

その後、孫の直^{すなお} 嘉和知^{かわち}が祖父の仕事を受け継ぎ、努力を重ねて改良し、生産額も増加したため、当時の代官からほめられたと言われています。

また、明治 10 年代には、政府が熱心に産業奨励を行い、綿糖共進めんとうきょうしんかい会がつくられました。そして、明治 13 年、1880 年には大阪で全国綿糖共進会が開催されました。このとき、川智の子孫で、現在の宇検村湯湾うけんそんゆわんに住んでいた直嘉和誠すなおがわせいは、30 斤、約 18 キログラムの黒糖と、サトウキビ 5 株を出品しました。そこで、黒糖の由来がはじめて発表され、政府から直川智の功勞に対して賞金百円が贈られました。

しかし、嘉和誠は川智の直系の子孫ではなかったため、当時、西仲間にしなかまに住んでいた総本家の家筋と伝えられる子孫と問題がおきましたが、当時の大島郡長であった中村兼志なかむらけんしが仲をとりもち、有志らと相談して、賞金百円と群島各村から集まった寄付金で神社を建ててことを決めました。そして、鹿児島県知事の許可を得て、明治 15 年に大和村恩勝おんがちの高千穂神社境内に開饒神社を建てました。

「開饒（ひらとみ）」には、産業を開拓したという意味があり、開饒神社は、直川智のサトウキビにかけた人生を称えるとともに、後の奄美の基幹産業であるサトウキビの基礎を築いたことに対して感謝の気持ちを込めて建てられ、さらに、わが国の産業開発の偉大な先駆者としての直川智まつを祀りました。その後、神社は 2 回の修復が行われ、昭和 59 年、1984 年には改築されました。

今回紹介した、直川智については、粕芳晴もみよしはるさんの著書『碑いしぶみのある風景 足でまとめた奄美大島史』に収められています。奄美の基幹産業となったサトウキビの栽培が始まった大和村磯平いそひらには、直川智の顕彰碑が建てられています。村里から離れ、きりたった山がそのまま海岸に落ち込み、がけ状になっている条件の悪い場所で、サトウキビの栽培を始めたのには、やはり、秘密に行わなければいけないという配慮だったのでしょうか。

10 月 27 日から「読書週間」が始まります。2013 年、第 67 回「読書週間」の標語は、「本と旅する、本を旅する」です。標語の作者である平佐大輔ひらさだいすけさんは、「旅とは非日常の体験。読書は日常の中で、非日常を体験。ここではないどこかの景色を眺めつつページをめくると、双方が微妙に入り交じり、なぜかいつもより登場人物や取り巻く世界観に強く思い入れてしまうことがあります。そんな感覚って素敵ですよ。」と述べています。

すばらしい奄美の自然や文化など、今を生きている人にとってはあたりまえのことを見つめ直す意味からも、奄美のことについて書かれた書籍に触れてみてはいかがでしょうか。そして、書籍に関係する場所など、一度訪ねてみてはどうでしょうか。

以上、鹿児島県立奄美図書館でした。